

第2次展示改装評価について

大倉宏 斎藤吉彦

大阪市立科学館

概要

第2次展示改装業務が完了しリニューアルした展示場が一般公開され、入館者が前年度比25%を超えるという好評を得た(2000年3月現在)。しかし、これだけで展示の善し悪しを判断するのは早計である。出来上がった展示を更によくするため、また、次期改装に備えるため、第2次展示改装評価を行った。

1. はじめに

1999年10月7日に第2次改装工事が完了し一般公開された。大きな試みの一つは科学史をハンズオン展示とケース展示の併設で表現することであった。入館者数は対前年度比で26%増加した(表1)。また、遠足で訪れた児童が再度親を連れて来館するという現象も見られるようになった。改装前にはこのような報告は全くなかった。児童に強いインパクトを与えるようになったことは明らかである。

	11月	12月	1月	2月	3月	計
1998年度	15659	8542	11537	12700	17269	65707
1999年度	18639	10315	14585	17176	21758	82473
前年度比	1.19	1.21	1.26	1.35	1.26	1.26

表1 第2次改装前後の入館者数比較(単位:人)

しかし、上記数字を展示の善し悪しを示すパラメーターと判断するのは早計である。すなわち、科学館はゲームセンターや遊園地などの遊技場と同様の興味だけで入館者が増加しているのではならない。来館者には科学的な知的行為による刺激、あるいはそれに繋がるものを与えることが必要で、展示場や個々の展示が制作意図通りに機能しているかどうかを冷静に調査しなければならない。もし、不具合などが明らかになれば、改良する努力が必要であり、また次期改装のためにその教訓を生かすという姿勢も求められる。

ところが、これは簡単なことではない。組織が一度できあがると、大小を問わず自らを律して改

革する力はなくなり、保身的行動に陥るとというのが普遍的な法則である。¹博物館組織も同様であろう。つまり、製作者の仕事は展示が公開された時点で終了する。そして、内外からの評価を受けるわけであるが、ここで、客観的な判断が出来ないのが一般的である。すなわち、好評は抵抗無く受入れるが、その一方で批判に対しては無意識のうちにかたくなに抵抗を試みてしまう。そして、思考や行動の原理が、「よりよいものを創る」から、「出来上がったものをいかに守るか」という思考・行為に陥る。そして、それが組織の行動原理となる。したがって、新展示を公開すること以上の実践は組織にとっては愚行である。しかし、この実践がなければ、市民にとってよい展示場の実現は期待出来ないであろう。

そこで、当館は第2次展示改装評価として、展示評価委員会の開催、博物館実習生による展示の修正を実施した。さらに、そこで得られた情報を下にハンズオン展示のレイアウト修正を行った。以下ではこれらについて述べる。

2. 展示評価委員会の開催

展示評価委員名簿

井上 晴貴 氏 (大阪市立阿倍野中学校教諭)

菊池 恵子 氏 (ピアノ教師・主婦)

染川 香澄 氏 (ハンズオンプランナー)

那須 孝悌 氏 (大阪市立自然史博物館館長)

横尾 武夫 氏 (大阪教育大学教授)

3. 博物館実習生による展示の修正

2次改装で導入したハンズオン展示は人気があるものの展示意図が伝わっていない場合が多い。²しかし、このことからハンズオン展示の教育効果を論じるのは早計である。操作型展示を設置しただけでは機能しないのは良く知られたことである。³⁴教育効果の大きい展示を作成するためにはさまざまな試行錯誤の実践が理想である。⁵そこで琵琶湖博物館で実施されたワークショップ⁴に習って、当館の博物館実習生に次のような課題を与えて展示の修正を試みた。

・前期実習生(8月実施)の課題

- 1 来館者の反応調査
- 2 学芸員制作による補助展示の設置とその効果調査
- 3 実習生によるラベルなどの修正および効果調査

・後期実習生(10月実施)の課題

- 1 来館者の反応調査
- 2 実習生によるラベルなどの修正および効果調査
- 3 実習生によるラベルなどの再修正および効果調査

対象とした展示物は電気の原理実験を行う操作型展示で「人間電池」「飛び出すコード」「北はどっち」「トランス」「磁力線を見よう」「電波が見える」「回転たまご」である。

今回の実習で次のことが明らかになった。人は実体験の少ないもの、予備知識の無い物には興味を示さない。⁶上記展示装置は電気の原理は自明であるかのように現象を見せているので、学芸員など物理に親しんだものには非常に印象的であるが、物理の知識がほとんどない一般の方、すなわち来館者の多くには実体験・予備知識の不足から印象に残らないものとなる。さらに、視界にも入らないことも多い。今回の調査から、実生活とのつながりから表現する必要性が明らかになった。これは、大英科学博物館展を実施した時に経験したことと同じである。⁷

「人は実体験からかけ離れたものを見ない。」

というのは法則であろう。したがって、実体験から観察の動機を喚起することが求められる。現在、関連する電化製品を分解した部品や補助パネルを追加することで実体験に近づけることを試みているがまだまだ十分展示意図が来館者に伝わっているとは言えない。今後も試行錯誤が必要である。

4. 4階展示場のレイアウト修正など

第2次展示改装は基本設計から公開まで一年半という短期間であった。⁸そのために生じた不具合は展示評価委員会でも多くが指摘された。特に目につくのはサイエンスタイムトンネルの操作説明版等の配置であった。経費削減の苦肉の策として2台の展示装置に対して1台の操作説明パネルを共有させるなどしたため、展示装置から離れた所に設置せざるを得なかった。操作説明などは展示装置の目の前に置かなければ誰も読まないことが来館者の動向から明らかに見てとれた。そこで、若干の経費でできることとして、看板の新設や展示装置・操作説明版の配置替えを実施した。そして、効果的なものに改良することができたと自負している。⁹

5. まとめ

欧米の先進館では来館者の反応を調査しながら展示を作り上げる(evaluation)ことが常識となっていて、それに関する学会まで存在する。^{3,4}日本ではようやく最近になってこの方法が紹介されたところである。欧米とでは予算やスタッフ数など全く異なるので同じ方法をそのまま取り入れることはできないが、次のことは教訓とすべきであろう。学芸員と来館者とでは背景となる知識、思考方法などが全く異なるため、来館者の反応を机上で予測することは不可能というのがevaluationの第一原理である。これは、展示場を来館者への情報伝達の間とするなら、ある程度経験を積みれば当然の帰結であり、evaluationの方法は自ずから生じるものと考えている。当館では何度も来館者の反応に裏切られるという経験をしたので、第2次改装ではこの認識が全くなかったわけではない。例えば、基本設計当初では移動

可能な展示装置などの議論があった。また、説明パネルを修正可能な設計にしたり、試作物等で来館者の反応を予め調査したものもあった。^{10,11}ただし、これらは部分的な取り組みでしかなく、時間や予算の制約で組織的に徹底されることはなかった。展示評価委員会で「楽屋落ち」と評されたのはこの認識の欠落が反映しているであろう。

今回行った評価は欧米先進館の evaluation の足元にも及ばないが、上記認識は深く館内に浸透したと考える。今後の課題は欧米先進館の模倣をすることではなく、この認識を下に大阪市立科学館流の展示活動を実践することである。

謝辞

本評価事業において、染川香澄氏には展示評価委員の他に、早い時期から裏方としても深く関わって頂き、多くの助言を頂きました。展示評価委員には熱心な議論を頂きました。さらに、研究会での発表やレポートの作成など型破りな委員会運営に快く協力頂きました。展示評価委員会研究会に参加頂いた皆様にも有益なコメントを多数頂きました。このように、多くの方々の協力を頂き、当館にとって大きな成果を得ることができました。ここに本事業に参画頂いた皆様に厚く御礼申し上げます。

文献

- 1 佐藤文隆「問われる科学者のエートス」現代日本文化論 13(岩波)
- 2 加藤賢一 大阪市立科学館研究報告 10, 67-75(2000)
- 3 ティム・コールトン「ハンズ・オンとこれからの博物館」東海大学出版会
- 4 「博物館を評価する視点」琵琶湖博物館研究調査報告 17(2000)
- 5 「ハンズオン! 2000 博物館のこれから」ハンズオン展示集中思考、関西会議
- 6 大阪市立科学館の博物館実習(本編)
- 7 齋藤吉彦 大阪市立科学館研究報告 10, 101-106(2000)
- 8 齋藤吉彦 大阪市立科学館研究報告 10,

45-53(2000)

- 9 長谷川能三「第2次改装、その後」(本編)
- 10 長谷川能三 大阪市立科学館研究報告 10, 83-84,89-90,95-99(2000)
- 11 齋藤吉彦 大阪市立科学館研究報告 10, 77-78(2000)